企画展「くらしの中の神々」覚書

石　川　博　行

はじめに

平成三年度の風土記の丘企画展は、資料館が所蔵する国の重要有形民俗文化財「北武蔵の農具」と移築民家の認識と理解を深めるために家の中の神々について考える展示とした。我々の生活は、都市に限らず、保守的といわれる農山漁村でも時間とともに変容していることは事実であろう。我々の住む家の中を見回してみると、特に食・住の変容は目を見張るものがある。１０年前とか、３０年前、あるいは戦前といった時間でその当時の生活を区切ると、この変容は少しずつ進むことに気づくが、でも普通に生活をしていると、それ以前の事など忘れてゆくことが多いこともわかる。また、いざとなると表面に表れて再認識することも多いことがわかる。この再認識することも少しずつ変容し、それがまた時間の流れと生活の変容を感じさせている。表面に表れて再認識する神々は家のどこにいるのかを考えようとして、「くらしの中の神々」展を企画した。また、大阪大学助教授小松和彦氏に「家の神々」と題して記念講演会も開催した。

そこで、企画展を準備する中で調査した資料紹介をし、企画展の覚書とする。また、小松先生には、展示解説用として「家の神々」と題した原稿を頂いたが、紙面の都合で掲載できなかったので、ここに掲載し我々の調査研究活動の参考としたい。

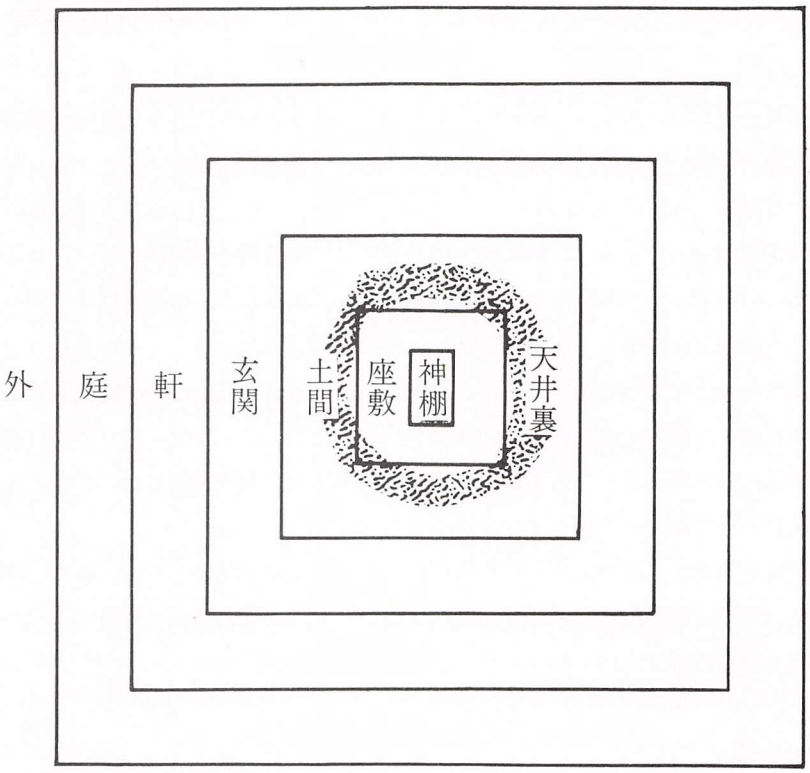
1　展示の構成について

家にはあるところまで行くと境界があって、例え家の者であっても勝手に出入りすることができない境界がある。他所の者はなおさら、魔（物）は絶対に越えさせない境界がある。このことを模式図にすると、図のとおりになる。また、外を魔（物）がいるケガレた空間とすれば、家は内の清浄なハレの空間とすることもできる。この境界と空間を重ねると、我々は、どの場所にどのような神を迎えて祀っているのか、同時に魔（物）を意識しているのがわかる。そこで展示構成は、外から家の中に入り座敷に上がって行くものとし、

（１）軒の神々
（２）玄関の神々
（３）土間の神々
（４）天井裏の神々
（５）座敷の神々
（６）屋外の神々

とした（註１）。

家の境界の模式図



2　調査資料の紹介

（1）　軒の神々

ハツカコガシ（1月20月）には、小麦を煎りそれを粉に挽き、長虫（蛇のこと）が入ってこないようにと軒下の雨落ちに沿って撒く（鳩ヶ谷）。コガシをコウセンと呼び、5月5日の端午の節供に行う（吉田　浦和）。

端午の節供（5月5日）には、剣に見たてた菖蒲と匂いの強い蓬を軒に刺して、魔物が入ってくるのを防ぐ（吉田　行田　和光）。

七夕（8月7日）には、マコモの馬を軒場に飾る（三芳）。

新盆の家（8月初めから）では廊下に盆提灯を掲げる（大宮）。

（2）　玄関の神々

神社や寺院の護符・神札を頂いてきて、泥棒や魔物の侵入を防ぐために、玄関の上や戸口に張り、戸守とする（戸田　白岡　秩父　北本）。

七夕が終わるとマコモの馬を玄関に吊し、魔よけとする（行田　白岡）。

魔物の侵入を防ぐため、スズメバチの巣を玄関に吊るす（日高　和光）。
魔物の侵入を防ぐため、サルのコシカケを玄関に打ち付ける（日高　和光）。
魔物の侵入を防ぐため、大國魂神社で買ってきた烏の団扇を玄関に打ち付ける（新座　三芳）。
魔物の侵入を防ぐため、高尾山で買ってきた天狗の団扇を玄関に打ち付ける（騎西）。
百日咳に罹らないように、お碗を玄関に打ち付ける（八潮）。
魔物の侵入を防ぐため、馬のわらじを玄関に吊す（和光）。
魔物の侵入を防ぐため、馬の蹄鉄を玄関に打ち付ける（騎西）。
魔物の侵入を防ぐため、第六天神社の天狗の絵馬を玄関に打ち付ける（岩槻）。
悪病除として、紙に「馬」の字を逆三角形に逆さまに書き、玄関に張る（秩父）。
魔除け・火伏せ・盗難よけとして、自然に穴の開いた火打ち石を玄関に吊るす（皆野）。
年中払いとして、正月のしめ飾りを掛けておく（騎西）。
年中払いとして、節分のヤッカガシを掛けておく（吉田）。
魔物の侵入を防ぐため、蛇の皮を玄関に掛けておく（吉田）。
魔除に桃の木などで作った弓を玄関にかける（秩父　行田）。
疫病よけ・魔よけ・蛇よけとして７月２８日の神社の祭礼の時に茅で作った蛇の頭をもらい、玄関に飾る（神川）。
藤の節供（５月４日）には、山藤を玄関に飾る（吉田）。
フセギ（７月１４日）には、樫の枝に護符を付け玄関に飾る（吉田）。
魔よけとして、沖縄土産の魔よけのインテリアを玄関に飾る（騎西）。

（３）土間の神々

玄関の戸の裏に護符や神札を貼り、悪魔払いとする（草加　大宮）。
女の人は、台所の隅にオキヌサマを祀り、守護を願う（川本）。
竈（かまど）の上に注連縄や幣束を飾り、火の神様、作神様などと呼ばれるかまどの神様を祀る（秩父）。
台所の隅に注連縄や幣束を飾り、火の神様、台所の神様と呼ばれる荒神様を祀る（北本）。
荒神様に鶏や馬の絵馬を供える（戸田　和光）。
荒神様に馬と書いた紙の絵馬とサルのコシカケを供える（戸田）。
土間に厩があったときは厩の前に馬の絵馬を飾り、馬の安全を願う（加須　戸田）。
悪病よけ、魔よけとして鬼の絵馬を飾る（嵐山）。
正月は、俵に幣束やマユダマ、雑煮などを供え、俵神様といって土間に飾る（岩槻）。
小正月は、伏せた臼に石臼を乗せケズリバナやマユダマ飾りを添えて豊作を祈る（行田）。

（４）天井裏の神々

家の鬼門に向かって、毎年、幣束と注連縄を天井裏の柱に結わえ付ける（草加）。

天井裏の柱に、古くなった護符・神札を結わえ付け家の守りとする（草加　坂戸）。
天井裏の梁に、初庚申の日に左縄をなって結わえ付けて魔よけとする（鳩ヶ谷　新座）。
天井裏の大黒柱に永代安全の護符を結わえ付ける（横瀬）。

（５）座敷の神々

神棚には、神札があって、毎朝あるいは１日、１５日の朝には必ず灯明とお水に炊きたてのご飯をあげる。ヤマイリ（１月２日）の日に七草粥に入れる芹を摘んで来て神棚の注連縄に刺して置いた（大滝）。
仏壇は、先祖代々の位牌があってそれを祀り、何かに付けてお願いしたり報告したりする。
エビスダイコクサマは、普段は棚に置かれているが、エビスコ（１月２０日と１１月２０日）には棚から降ろされ、仕事に出掛けるとか仕事をしてお金をたくさん持って帰ってくるなどといわれて箕の中（騎西　吉田）や机（行田）あるいは簞笥の上（北本）に飾る。
子供の健康と生長を祈って、浅間神社に詣（７月１日）で**初山の団扇と布巾**をいただき床の間などに飾る（行田　桶川）。
子供の安全や生長を祈って、玩具の**サルッコ**を縫って子供に与える（川本）。
子供が生まれると子供の生長や安全を祈って、地蔵様に奉納されている**人形**を借りてきて玩具として与え、無事に５才頃まで生長すると人形を一体造って、借りてきた人形と一緒に地蔵様に返す（大滝）。
五穀豊穣を祈って、稲荷神社の土焼きの**オコンコンサマ**を借りて神棚に飾る（神川　吉田）。
布団を入れる押入れの上にヘーヤガミサマ（寝床の神様）を祀る（北本）。
正月は、**歳神様の掛け軸**を床の間に飾る（白岡）。
正月は、天照皇太神宮の掛け軸を床の間に飾る（狭山）。
五穀豊穣を祈って、古い**カマドッカエのカマ**を持って諏訪神社に行き新しいカマと交換し、それを神棚に飾る（騎西）。
正月は、座敷に**歳神棚**を恵方に向かって天井から吊るして作る（狭山　東松山　日高）。
小正月は、座敷にマユダマ飾りをする（秩父）。
カユカキボウ（小正月の作り物）は、歳神様に供える（長瀞）。
タワラ（小正月の作り物）は、恵比寿大黒様に供える（長瀞）。
ウス・キネ（小正月の作り物）は、歳神様に供える（長瀞）。
ノドウグ（小正月の作り物）は、歳神様に供える（東秩父）。
メオトカザリ（小正月の作り物）は、床の間に飾る（長瀞）。
タカラブネ（小正月の作り物）は、床の間に飾る（長瀞）。

（６）　屋外の神々

七夕が終わるとマコモの馬を屋根に上げて、魔よけとする（上尾　白岡）。
子供の歯が抜けると下の歯だと屋根に投げあげ、上の歯だと床下に投げ入れると丈夫な歯が生える。

ダンコン（小正月の作り物）は、井戸神様に供える（荒川）。

外便所には、**カタナ**（小正月の作り物）を供える（長瀞）。

外に便所があった頃は、烏芻沙摩明王のお姿の書かれた板の**便所神様**を飾った（戸田）。

屋根には、水や寿の文字を書き、火災にあわないようにとお呪いをする（行田）。

屋根に**鍾馗様**を乗せ、魔よけにする（騎西）。

屋敷の隅に、麦藁で祠を作り中に**御魂石**を置き屋敷神として祀り、家の安泰を願う（神川）。

庭先に、竹に鎌を逆さに付けたカゼキリカマを立てて、魔物を防ぐ（日高　皆野）。

庭先に、竹に籠を逆さに付けたメカイを立てて、魔物を防ぐ（行田　和光）。

ヒトガタ・カタシロに家族の名前を書き、ケガレを川に流し、健康を祈る（神川　長瀞　鷲宮 大宮）。

子供の名前を書いた**タスキ**を地蔵様に奉納し、子供の健康や生長を祈願する（行田）。

七夕馬を庭先に飾り、豊作を祈る（行田）。また**七夕馬**に**浴衣**を掛けてそれを子供に着せると子供が丈夫に育つ（東松山　日高）。

小正月には、屋敷神様に**ケズリバナ**を飾る（草加）。

便所に「しも神様」を祀り、小正月にはカタナとハナをあげる（神川）。

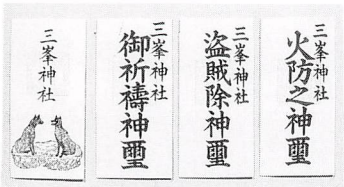
（太字は展示資料）

以上がこの期間に調査した資料で、主に県内市町村発行の市町村史民俗編を参考にした。

また、企画展の開催にあたっては、調査の段階から多くの方々からご協力を頂いたことをここに明記し感謝の意を表したい。

註１　企画展では、この他に生活の守として「農業の神々」を取り上げた。また、比較のために東京都奥多摩の小正月の作り物、群馬の小正月の作り物、東北の神々（カマガミサマ、オシラサマ、火伏せの神、オシンメイサマ）なども展示した。

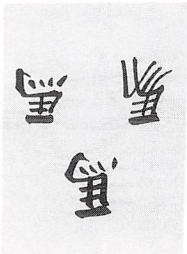
玄関の神々



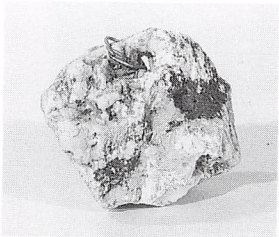
護符
（大滝村）

烏の団扇
（三芳町）

天狗の団扇
（騎西町）

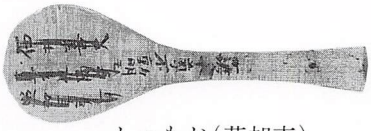


逆さ馬（秩父市）
復元資料

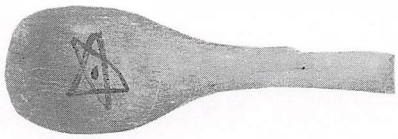


穴あき石
（皆野町）

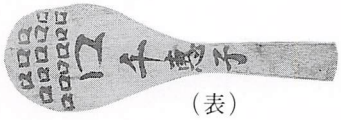
玄関の神々



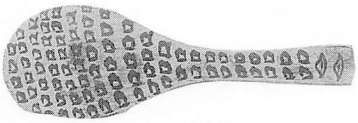
しゃもじ(草加市)



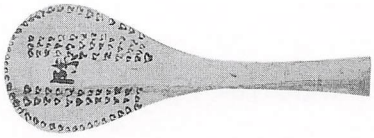
しゃもじ(岩槻市)



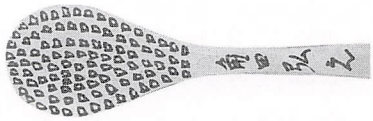
(表)



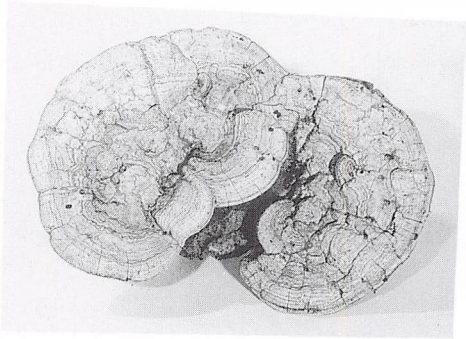
(裏)
しゃもじ(白岡町)



しゃもじ(白岡町)

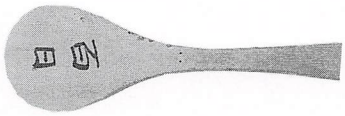


しゃもじ(白岡町)

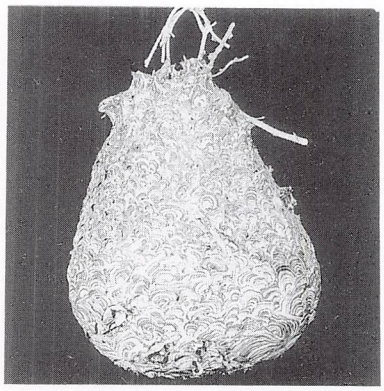


サルのコシカケ(日高市)

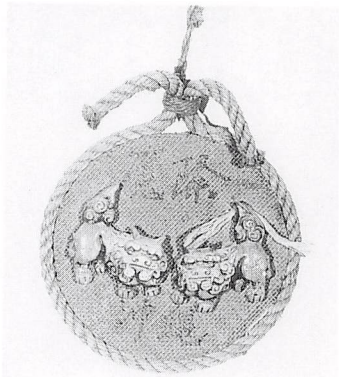
しゃもじ(白岡町)



しゃもじ(白岡町)

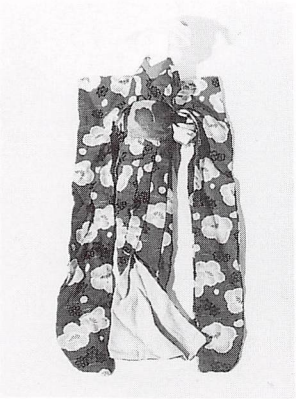


スズメバチの巣(日高市)



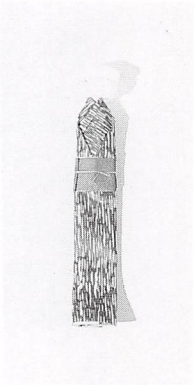
魔除(騎西町)

土間の神々

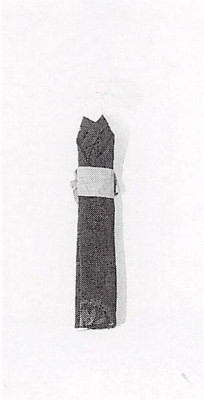


オキヌサマ（川本町）

オキヌサマ（川本町）

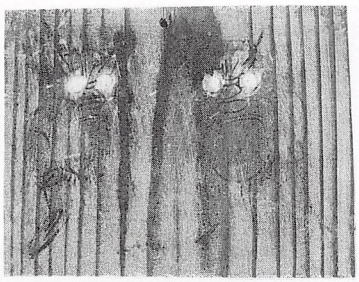


オキヌサマ（川本町）



オキヌサマ（川本町）

絵馬（戸田市）復元資料



絵馬（嵐山町）

絵馬（戸田市）

絵馬（岩槻市）

絵馬（戸田市）

座敷の神々

サルツコ（川本町）

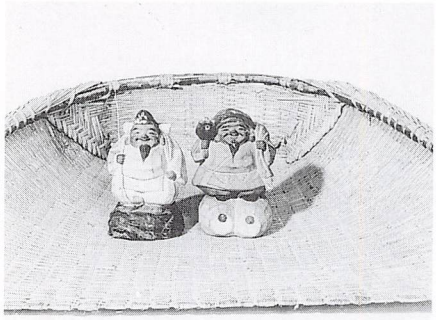
（表）

（裏）

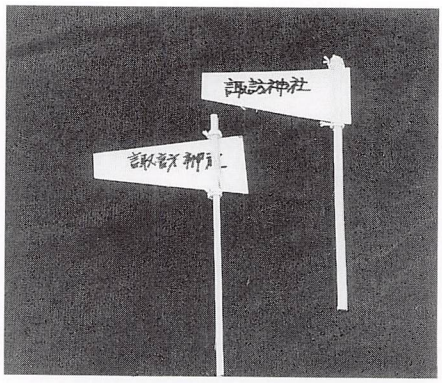
地蔵様の人形

（表）

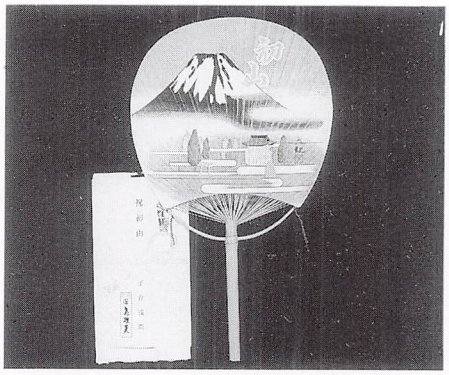
（裏）



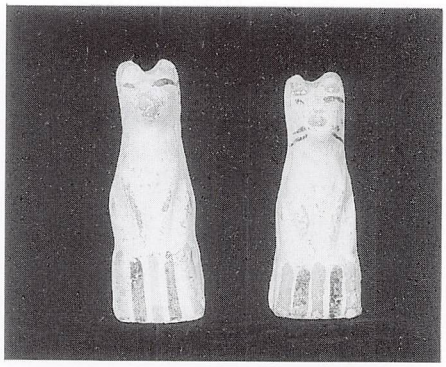
エビスダイコクサマ（騎西町）　復元資料



カマドツカエのカマ（騎西町）

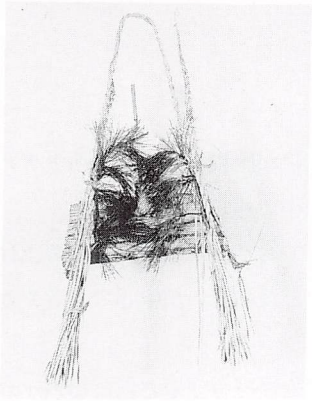


初山の団扇と布巾（行田市）

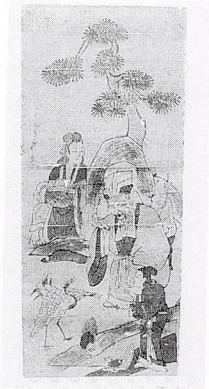


オコンコンサマ（神川町）

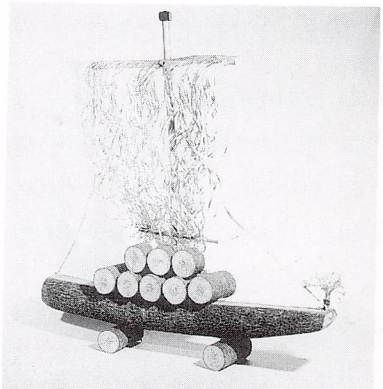
座敷の神々（正月、小正月の作り物）



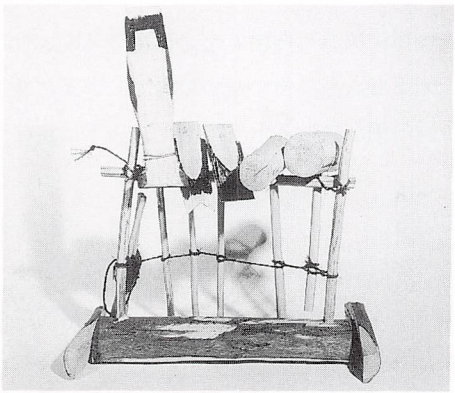
歳神棚（日高市）



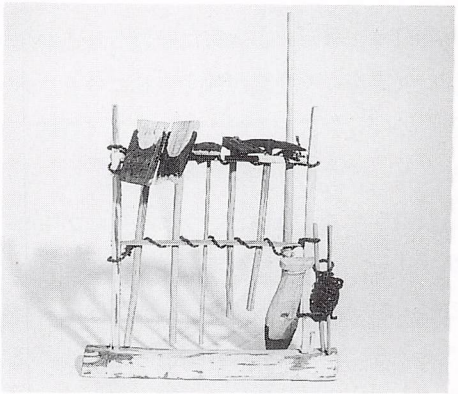
歳神様の掛け軸（白岡町）



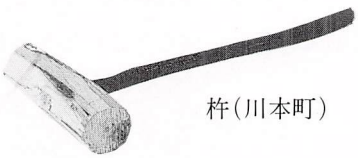
宝船（長瀞町）



農道具（東秩父村）



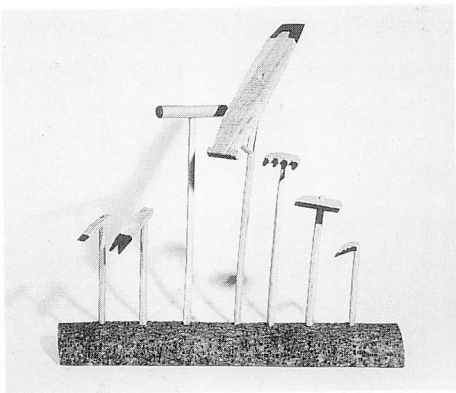
農道具（東秩父村）



杵（川本町）

臼（川本町）

鍬（川本町）



農道具（東秩父村）

クダキ（川本町）

3　境界の性格について

次に、それぞれの境界に見られる神々の特徴を考えてみる。

軒は、家と外を区別する境界で、災いをもたらす魔物、神、先祖が出現してくる場所と考えられている。軒の神は、年間を通して意識することは少なく、行事の中で感じられている。

玄関は、防衛者の我々と侵入者の魔物との戦いの最前線となっており、多くの呪いや魔よけが見られ、境界が明確である。性格は、災が入ってこないようにといったお呪いが中心で、塞ぐ要素が強く表れている。

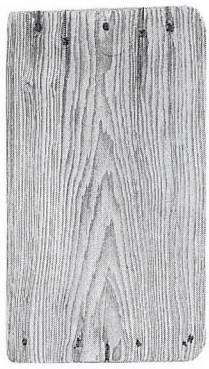
土間は、火を扱う女の人の空間という性格が見える。また、家の経済を守ることに重点がおかれ神々もこれに添った神が祀られている。しかし、玄関の裏側という呪い性の強い境界の裏側も合わせ持っている。

天井裏は、薄暗く、人目に触れることが少ないが、境界である。性格も家全体を守る呪い性と経済的な安定を守る要素が強く表れている。もう一方、床下も人目に付かない境界で、冬至に床下に柚子を投げ入れると火難よけになる（岩槻）とか、子供の歯が抜けると上の歯だと床下に投げ入れるなどとも言う。

座敷の神々は、呪いというより祈願が中心になっている。一般的には、神棚、仏壇、恵比寿大黒様が常駐し、家の安定を守ってくれるといえる。特に、神棚と仏壇は毎日の拝礼にみられるように家の経済的安定や家の永続、家族の健康・生長、その時々の幸せを報告するなどと、精神的な拠り所でもある。家の改築などによって座敷のなかでは神を祀る位置が移動することも多く見られ、移動することに伴って神に対する考え自体が変容していることがわかる。このことは今後の研究課題としたい。

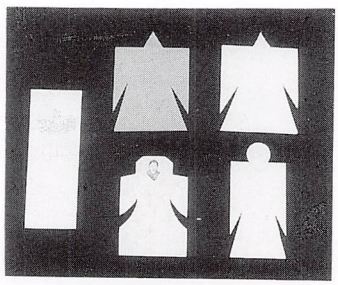
屋外の神々は、遠くからやってくる魔物を威圧する神々で、性格は呪い性が強い。屋外に便所があった頃は、便所は不用心で危険な場所で、また、人間にとっては自然に戻るところだとも考えられていて、境界と意識されている。

屋外の神々



便所神（戸田市）

御魂石（神川町）



ヒトガタ
カタシロ（神川町・長瀞町・鷲宮町・大宮市）

4　家の神々

小松和彦（大阪大学助教授）

私たちはいつも「幸せ」になりたいと願っている。「幸せ」の中味は時代とともに変化するといっていいかと思うが、しかし遠い昔から変わらない幸せの中味もあった。たとえば健康（無病息災）でありたい、豊年満作でありたい、立身出世したいといった願いは、今も昔も多くの人びとの共通の願いであるといえよう。

日本は長く農業を基盤とした文化を形成し、「家」および「ムラ」と呼ばれる社会集団のもとで生活を営んできたので、主として庶民の文化は「家」と「ムラ」と農業をめぐってはぐくまれてきた。そしてその内容はまことに多彩である。しかし、「ムラ」と「家」の利害はときには一致し、またときには相反した。そこからさまざまな祭りや共同作業や「掟」が生み出され、また問題も生じたわけであるが、概して近世以降の日本人は「家」に比重を置いた価値観を強調し、その結果、「家」の存亡、盛衰に多大な関心を払ってきた。このため、高度成長期以降、急速に前近代的な民俗文化が消滅していったにもかかわらず、「家」をめぐる民俗は今日でもなお各地で根強く生き続けているといえるのである。

「家」はいくつかの側面から構成されている。一つは人間集団という面である。「家」集団は血縁を核とした集団で、その内部においても頭主を頂点とする権力・権威のシステムが確立されていたが、互いに協力し助け合う集団として認識されていた。つまり、人びとはまず「家」のメンバーの互いの「幸せ」を求めて生活していたのであった。

では、どのようにして「家」の「幸せ」を実現したらいいのだろうか。もちろん、その最前提はメンバーたちの肉体を用いての努力つまり労働であった。しかし、それだけでは充分ではなかった。というのは、それにもかかわらず、「幸せ」の実現を妨害するもの、凶作や災害や病気が生じたからである。

これが「家」のもう一つの側面である。このために、人びとは神にすがろうとした。人びとは神の力で「不幸」を防いだり除こうとした。日本にはさまざまな神が存在していると、信じられていたので、そうした神々の力を借りて人びとは「家」の繁栄をはかろうとしたのである。たとえば、正月には家中の者が「恵方訪り」（初詣で）をして健康その他を祈った。節分には豆をまいて鬼＝災厄を追い払おうとした。また、五月の節供には菖蒲で魔よけをしようとした。それだけではない。霊験あらたかと評判の高い社寺があれば、その社寺の神仏の力を借りて家を守ってもらおうと護符のたぐいを手に入れて、戸口に貼ったりした。富貴自在との評判の高い「恵比寿」や「大黒」「稲荷」なども積極的に勧請し、家のなかや屋敷に祭ったのであった。しかも、それが高じて、カマドにはカマド神が、便所には便所神が、といった具合に細分化されるまでに至った。日本の神は分業化されたのである。そして、そのために日本の神観念は多彩なものになったともいえるのである。

この「くらしの中の神々」の展示を御覧いただくと、そのあたりのことが充分におわかりいただけるのではないだろうか。

参考文献

都丸十九一ほか（１９９０）：関東地方の住い習俗　明玄書房
新井栄作（１９７８）：おきぬさま信仰　埼玉民俗第８号
清水武甲（１９７１）：秩父民俗　耕地の人々　木耳社
吉田町（１９８２）：吉田町史
浦和市（１９８０）：浦和市史　民俗編
和光市（１９８３）：和光市史　民俗編
三芳町・富士見市・大井町・上福岡市教育委員会（１９７４）：埼玉県入間東部地区の民俗－年中行事の変化－
大宮市（１９６９）：大宮市史　第５巻
戸田市（１９８３）：戸田市史　民俗編
白岡町（１９９０）：白岡町史　民俗編
北本市教育委員会（１９８９）：北本市史　民俗編
日高町（１９８９）：日高町史　民俗編
与野市（１９８０）：与野市史　民俗編
大井町（１９８５）：大井町史　民俗編
騎西町（１９８５）：騎西町史　民俗編
岩槻市（１９８４）：岩槻市史　民俗編
草加市（１９８７）：草加市史　民俗編
八潮市（１９８５）：八潮市史　民俗編
皆野町（１９８６）：皆野町史　資料編５　民俗
神川町（１９８９）：神川町誌
坂戸市（１９８５）：坂戸市史　民俗資料編
鳩ヶ谷市（１９８８）：鳩ヶ谷市史　民俗編
桶川市（１９８８）：桶川市史　民俗編
狭山市（１９８５）：狭山市史　民俗編
東松山市（１９８３）：東松山市史　資料編第５巻　民俗編
富士見市（１９８９）：富士見市史　資料編７　民俗
滑川村（１９８４）：滑川村史　民俗編
荒川村（１９８３）：荒川村誌
東京学芸大学民俗研究会（１９６９）：古利根の村と山の村　埼玉県駒西町正能
埼玉県立さきたま資料館（１９７７）：さきたま民俗歴
埼玉県立歴史資料館（１９８６）：小正月とモノツクリ
埼玉県（１９８６）：埼玉県史　別編２　民俗２
埼玉県立文化会館（１９６９）：埼玉生活文化シリーズⅢ　住居の歴史　真珠書院
埼玉県教育委員会（１９８０：埼玉県市町村誌２０巻